

卒業時アンケートの結果概要について

教育推進部門長 岡本 吉央

1. 趣旨

大学教育センター、アドミッションセンター及び IR 室では、平成 30(2018)年度から、学生思考力調査(アセスメントテスト及びアンケート聴取)を実施している。

同調査は、学生の「思考力」「姿勢・態度」「経験」を測定し大学で身につけるべき力の可視化を行うことで学生自身が主体的な学びを進めるための動機付けを促すとともに、調査結果を集計・分析し、教育の内部質保証の実質化、学生の満足度測定等の基礎データとして活用することとしている。

本資料は、同調査の一環として令和 2(2020)年度に実施したアンケート聴取のうち、卒業研究に着手している学域 4 年次生、修士論文に至る研究を実施している博士前期課程 2 年次生、博士論文に至る研究を実施している博士後期課程 3 年次生の回答を集計し、結果を分析したものである。なお、学域 4 年次生に対するアンケートは平成 30(2018)年度、令和元(2019)年度にも実施しているため、経年の比較を併せて行う。

2. アンケート実施の概要

調査期間	令和 2(2020)年 12 月 7 日 - 令和 3(2021)年 1 月 29 日
調査対象者	卒業研究に着手している学域 4 年次生(回答数 177) 博士前期課程 2 年次生(回答数 152) 博士後期課程 3 年次生(回答数 20)
調査方法	学生思考力調査(GPS-Academic)の一環として実施 学生は Web システムを利用して回答
質問数	大設問 26 問(大設問それぞれに対して小節門を多数設定)
質問内容	教育全般、授業内容、学生支援、施設環境等

3. アンケート集計結果の概要

3.1 大学の魅力

「大学全体」の魅力として、「自分が学びたい学問分野が学べる」、「カリキュラムや学び方に魅力・特色がある」、「取りたい資格や免許が取得できる」、「教わりたい教員がいる」、「留学支援が充実している・国際交流が盛んである」、「就職に有利、就職支援が充実している」、「知名度がある」、「歴史・伝統がある」、「キャンパス・学生の雰囲気がいよい」、「施設・

設備が充実している」、「キャンパスの立地や周辺の環境がよい」、「自宅から通える」、「学費が安い、奨学金が利用できる」、「総合大学である・単科大学である」、「女子大である・共学である」、「その他」、「特にない・わからない」の18項目から1位と2位を選択することを求めた。

1位+2位選択率が高かった上位3項目は、学域4年次生においては、「自分が学びたい学問分野が学べる」(57.1%)、「就職に有利、就職支援が充実している」(41.8%)、「学費が安い、奨学金が利用できる」(20.9%)であり、博士前期課程2年次生においては、「自分が学びたい学問分野が学べる」(71.1%)、「就職に有利、就職支援が充実している」(46.7%)、「学費が安い、奨学金が利用できる」(18.4%)であり、博士後期課程3年次生においては、上位4項目が「自分が学びたい学問分野が学べる」(60.0%)、「教わりたい教員がいる」(40.0%)、「就職に有利、就職支援が充実している」(20.0%)、「自宅から通える」(20.0%)であった。学域4年次生の経年変化を見ると、上位3項目は平成30(2018)年度、令和元(2019)年度の調査においても、順位を含めて同じであるが、選択率は同等か低下している。具体的には、「自分が学びたい学問が学べる」の選択率は平成30(2018)年度では51.0%、令和元(2019)年度では57.1%であり、「就職に有利、就職支援が充実している」の選択率は平成30(2018)年度では46.4%、令和元(2019)年度では47.2%であり、「学費が安い、奨学金が利用できる」の選択率は平成30(2018)年度では24.7%、令和元(2019)年度では22.6%であった。一方、令和2(2020)年度で選択率が大きく増加した選択肢は「カリキュラムや学び方に魅力・特色がある」(平成30(2018)年度8.7%、令和元(2019)年度6.3%、令和2(2020)年度13.6%)と「教わりたい教員がいる」(平成30(2018)年度4.2%、令和元(2019)年度4.4%、令和2(2020)年度6.8%)であった。

「学問内容や学び方」に関する魅力として、「学ぶことができる学問分野・領域に特色がある」、「教養教育が充実している」、「専門科目を低学年から学べる」、「専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる」、「語学教育が充実している」、「資格や免許取得の支援が充実している」、「キャリア形成支援・キャリア教育が充実している」、「フィールドワークや実習が多い等、教育内容や方法が実践的である」、「厳しい環境やカリキュラムで鍛えられる」、「丁寧に指導してくれる、教員との距離が近い」、「少人数教育であるため、学びやすい」、「その他」の12項目から1位と2位を選択することを求めた。

1位+2位選択率が高かった上位3項目は、学域4年次生においては、「学ぶことができる学問分野・領域に特色がある」(63.3%)、「専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる」(33.3%)、「厳しい環境やカリキュラムで鍛えられる」(25.4%)であり、博士前期課程2年次生においては、「学ぶことができる学問分野・領域に特色がある」(73.0%)、「専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる」(24.3%)、「丁寧に指導してくれる、教員との距離が近い」(20.4%)であり、博士後期課程3年次生においては上位4項目が「学ぶことができる学問分野・領域に特色がある」(60.0%)、「丁寧に指導してくれる、教員との距離が近い」(30.0%)、「フィールドワークや実習が多いなど、教育内容や方法が実践的である」(20.0%)、「厳しい環境やカリキュラムで鍛えられる」(20.0%)であった。

学域 4 年次生の経年変化を見ると、上位 3 項目は平成 30 (2018) 年度、令和元 (2019) 年度の調査においては「特にない・わからない」が 2 位、「専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる」が 3 位であった (令和元 (2019) 年度においては「厳しい環境やカリキュラムで鍛えられる」も同率 3 位)。選択率を見ると、「専攻やコースなどを入学後にじっくり選ぶことができる」(平成 30 (2018) 年度 21.3%、令和元 (2019) 年度 19.8%)、「厳しい環境やカリキュラムで鍛えられる」(平成 30 (2018) 年度 19.8%、令和元 (2019) 年度 20.2%) と「丁寧に指導してくれる、教員との距離が近い」(平成 30 (2018) 年度 10.3%、令和元 (2019) 年度 10.3%、令和 2 (2020) 年度 11.3%) が令和元 (2019) 年度と比較して大きく上昇していた。

3.2 目標・カリキュラム・授業内容の理解

4 つの設問において、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の 4 段階で回答を求め、「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」と回答した割合を肯定回答率とした。

学域 4 年次生に対しては、すべての設問で令和元 (2019) 年度と比較して肯定回答率が上昇した。具体的には、「科目間の関連やカリキュラムの全体像を理解できている」に対して、平成 30 (2018) 年度は 76.4%、令和元 (2019) 年度は 78.6%、令和 2 (2020) 年度は 83.1% であり、「大学は、シラバスやガイダンスなどで個々の授業内容に対する情報を十分に提供している」に対して、平成 30 (2018) 年度は 83.7%、令和元 (2019) 年度は 80.6%、令和 2 (2020) 年度は 85.9% であり、「あなたが通う大学で、自分の将来に必要な学びを得ることができると思う」に対して、平成 30 (2018) 年度は 88.2%、令和元 (2019) 年度は 84.1%、令和 2 (2020) 年度は 92.1% であり、「所属する学部・学科の教育目標 (どのような人材の育成を目指しているか) を知っている」に対して、平成 30 (2018) 年度は 54.4%、令和元 (2019) 年度は 56.3%、令和 2 (2020) 年度は 62.7% であった。

博士前期課程 2 年次生において、上記 4 設問に対する肯定回答率はそれぞれ 80.9%、88.2%、96.1%、71.1% であり、博士後期課程 3 年次生において、上記 4 設問に対する肯定回答率はそれぞれ 80.0%、90.0%、95.0%、75.0% であった。

3.3 入学後のイメージ変化

「よくなった」、「変わらない」、「悪くなった」の 3 段階で回答を求めた。

学域 4 年次生において、「よくなった」は平成 30 (2018) 年度 21.7%、令和元 (2019) 年度 26.6%、令和 2 (2020) 年度 28.8% と上昇した。「変わらない」は平成 30 (2018) 年度 57.8%、令和元 (2019) 年度 50.0%、令和 2 (2020) 年度 54.8% と、一旦下降し今年度上昇した。「悪くなった」は平成 30 (2018) 年度 20.5%、令和元 (2019) 年度 23.4%、令和 2 (2020) 年度 16.4% と、一旦上昇し今年度下降した。

博士前期課程2年次生において、「よくなった」は40.8%、「変わらない」は53.9%、「悪くなった」は5.3%であった。博士後期課程3年次生において、「よくなった」は50.0%、「変わらない」は50.0%、「悪くなった」は0.0%であった。

3.4 成長実感

4段階で回答を求め、以下「強く実感する」と「やや実感する」の合計を肯定回答率、「あまり実感しない」と「まったく実感しない」の合計を否定回答率とする。

学域4年次生において、肯定回答率は平成30(2018)年度84.0%、令和元(2019)年度83.8%、令和2(2020)年度83.0%であり、否定回答率は平成30(2018)年度15.9%、令和元(2019)年度16.3%、令和2(2020)年度16.9%であり、経年変化はほぼなかった。一方で、「強く実感する」の回答率は、平成30(2018)年度32.3%、令和元(2019)年度29.8%、令和2(2020)年度36.7%であり、今年度大きく上昇した。

博士前期課程2年次生において、肯定回答率は94.8%、否定回答率は5.3%であった。博士後期課程3年次生において、肯定回答率は90.0%、否定回答率は10.0%であった。

3.5 学部・学科のお勧め度

4段階で回答を求め、以下「とても勧めたい」と「まあ勧めたい」の合計を肯定回答率、「あまり勧めたくない」と「まったく勧めたくない」の合計を否定回答率とする。

学域4年次生において、肯定回答率は平成30(2018)年度65.4%、令和元(2019)年度68.6%、令和2(2020)年度67.8%であり、否定回答率は平成30(2018)年度34.6%、令和元(2019)年度31.3%、令和2(2020)年度32.2%であり、経年変化はほぼなかった。一方で、「とても勧めたい」の回答率は、平成30(2018)年度9.5%、令和元(2019)年度10.3%、令和2(2020)年度15.3%であり、今年度大きく上昇した。

博士前期課程2年次生において、肯定回答率は84.2%、否定回答率は15.8%であった。博士後期課程3年次生において、肯定回答率は100.0%、否定回答率は0.0%であった。

3.6 大学教育・学生生活への満足度

9項目に対して、「とても満足している」、「まあ満足している」、「あまり満足していない」、「まったく満足していない」、「わからない・該当しない」の5段階で回答を求めた。「とても満足している」と「まあ満足している」の選択率を肯定回答率、「あまり満足していない」と「まったく満足していない」の選択率を否定回答率とする。

学域4年次生において、肯定回答率の高い上位3項目は「授業内容」(83.6%)、「友人と人間関係」(80.3%)、「カリキュラム(入学から卒業までの科目配置や履修の体系)」(79.1%)であり、肯定回答率の低い下位3項目は「留学・国際交流支援」(32.2%)、「語学教育・語学向上支援」(40.1%)、「学生窓口対応」(48.0%)であった。一方、否定回答率の高い上位3項目は「語学教育・語学向上支援」(54.8%)、「キャンパス環境・学生サービス」

(37.3%)、「教員」(22.6%)であり、否定回答率の低い下位3項目は「就職・進路支援」(11.9%)、「友人との関係」(14.1%)、「授業内容」(15.8%)であった。

学域4年次生の経年変化において特筆する事項は以下の通りである。「カリキュラム」の肯定回答率が上昇した(平成30(2018)年度67.3%、令和元(2019)年度60.3%、令和2(2020)年度79.1%)、「授業内容」の肯定回答率が上昇した(平成30(2018)年度70.7%、令和元(2019)年度71.4%、令和2(2020)年度83.6%)、「教員」の肯定回答率が上昇した(平成30(2018)年度71.5%、令和元(2019)年度71.4%、令和2(2020)年度76.8%)、「語学教育・語学力向上支援」の肯定回答率が上昇し(平成30(2018)年度32.7%、令和元(2019)年度35.7%、令和2(2020)年度40.1%)、否定回答率が低下した(平成30(2018)年度60.8%、令和元(2019)年度58.3%、令和2(2020)年度54.8%)、「キャンパス環境・学生サービス」の肯定回答率が上昇した(平成30(2018)年度48.7%、令和元(2019)年度47.6%、令和2(2020)年度57.0%)、「学生窓口対応」の否定回答率が低下した(平成30(2018)年度30.4%、令和元(2019)年度31.4%、令和2(2020)年度22.0%)

博士前期課程2年次生において、肯定回答率の高い上位4項目は「カリキュラム」(88.2%)、「授業内容」(84.9%)、「教員」(83.6%)、「友人との人間関係」(83.6%)であり、肯定回答率の低い下位3項目は「留学・国際交流支援」(30.2%)、「語学教育・語学力向上支援」(41.4%)、「学生窓口対応」(55.3%)であった。一方、否定回答率の高い上位3項目は「語学教育・語学力向上支援」(49.4%)、「キャンパス環境・学生サービス」(23.7%)、「留学・国際交流支援」(22.4%)であり、否定回答率の低い下位3項目は「友人との人間関係」(9.2%)、「カリキュラム」(10.6%)、「就職・進路支援」(12.5%)であった。

博士後期課程3年次生において、肯定回答率の高い上位4項目は「カリキュラム」(95.0%)、「キャンパス環境・学生サービス」(90.0%)、「授業内容」(80.0%)、「教員」(80.0%)であり、肯定回答率の低い下位3項目は「留学・国際交流支援」(40.0%)、「語学教育・語学力向上支援」(50.0%)、「就職・進路支援」(55.0%)であった。一方、否定回答率の高い上位4項目は「語学教育・語学力向上支援」(25.0%)、「授業内容」(20.0%)、「教員」(20.0%)、「留学・国際交流支援」(20.0%)であり、否定回答率の低い下位3項目は「カリキュラム」(5.0%)、「キャンパス環境・学生サービス」(10.0%)、「就職・進路支援」(10.0%)、「学生窓口対応」(10.0%)であった。

3.7 教育施設の利用度

6項目に対して、「非常によく利用する」、「まあ利用する」、「あまり利用していない」、「まったく利用していない」、「施設がない」の5段階で回答を求めた。「非常によく利用する」と「まあ利用する」の選択率を肯定回答率、「あまり利用していない」と「まったく利用していない」の選択率を否定回答率とする。

学域4年次生において、「ラーニングコモンズなどの学習支援施設」の肯定回答率は39.6%、否定回答率は57.1%であり、「図書館(蔵書、レファレンスサービス)」の肯定回答率は79.1%、否定回答率は20.9%であり、「パソコンルーム」の肯定回答率は55.4%、否定回答率は44.7%

であり、「語学学習センター」の肯定回答率は 4.6%、否定回答率は 76.3%であり、「実験室・演習室」の肯定回答率は 53.7%、否定回答率は 45.7%であり、「研究室」の肯定回答率は 83.6%、否定回答率は 16.4%であった。

学域 4 年次生の経年変化を見ると、「研究室」に対して「非常によく利用する」の回答率が大幅に低下した（令和元（2019）年度 76.2%、令和 2（2020）年度 55.9%）。一方で、肯定回答率が大幅に上昇したのは、「ラーニングcommonsなどの学習支援施設」（令和元（2019）年度 32.5%、令和 2（2020）年度 39.6%）、「図書館（蔵書、レファレンスサービス）」（令和元（2019）年度 74.2%、令和 2（2020）年度 79.1%）、「パソコンルーム」（令和元（2019）年度 44.4%、令和 2（2020）年度 55.4%）であった。

博士前期課程 2 年次生において、「ラーニングcommonsなどの学習支援施設」の肯定回答率は 29.6%、否定回答率は 65.1%であり、「図書館（蔵書、レファレンスサービス）」の肯定回答率は 59.9%、否定回答率は 39.5%であり、「パソコンルーム」の肯定回答率は 29.0%、否定回答率は 70.4%であり、「語学学習センター」の肯定回答率は 7.8%、否定回答率は 85.5%であり、「実験室・演習室」の肯定回答率は 42.8%、否定回答率は 56.6%であり、「研究室」の肯定回答率は 97.3%、否定回答率は 2.0%であった。

博士後期課程 3 年次生において、「ラーニングcommonsなどの学習支援施設」の肯定回答率は 30.0%、否定回答率は 70.0%であり、「図書館（蔵書、レファレンスサービス）」の肯定回答率は 55.0%、否定回答率は 45.0%であり、「パソコンルーム」の肯定回答率は 25.0%、否定回答率は 75.0%であり、「語学学習センター」の肯定回答率は 30.0%、否定回答率は 70.0%であり、「実験室・演習室」の肯定回答率は 35.0%、否定回答率は 65.0%であり、「研究室」の肯定回答率は 90.0%、否定回答率は 10.0%であった。

3.8 授業の役立ち度

「論理的・批判的思考力」、「数量的・統計的スキル」、「情報リテラシー」、「問題解決力」、「チームワーク・リーダーシップ」、「プレゼンテーションスキル」、「ディスカッションスキル」、「コミュニケーションスキル」、「文章作成力」、「語学力」の 10 項目に対して、4 段階で回答を求めた。「とても役に立っている」と「まあ役に立っている」の回答率の合計を肯定回答率とした。

学域 4 年次生において、肯定回答率の高い上位 3 項目は「数量的・統計的スキル」（94.4%）、「情報リテラシー」（91.5%）、「論理的・批判的思考力」（88.1%）であり、肯定回答率の低い下位 3 項目は「語学力」（29.9%）、「チームワーク・リーダーシップ」（35.0%）、「コミュニケーションスキル」（50.3%）であった。経年変化を見ると、令和元（2019）年度に比べて肯定回答率が大幅に上昇したのは、「論理的・批判的思考力」（令和元（2019）年度 77.4%、令和 2（2020）年度 88.1%）、「数量的・統計的スキル」（令和元（2019）年度 87.7%、令和 2（2020）年度 94.4%）であり、肯定回答率が大幅に低下したのは、「語学力」（令和元（2019）年度 40.5%、令和 2（2020）年度 29.9%）であった。

博士前期課程 2 年次生において、肯定回答率の高い上位 3 項目は「数量的・統計的スキル」(95.4%)、「情報リテラシー」(89.5%)、「問題解決力」(88.8%)であり、肯定回答率の低い下位 3 項目は「語学力」(47.4%)、「チームワーク・リーダーシップ」(57.2%)、「ディスカッションスキル」(69.7%)であった。博士後期課程 3 年次生において、肯定回答率の高い上位 3 項目は「数量的・統計的スキル」(95.0%)、「問題解決力」(95.0%)、「文章作成力」(95.0%)であり、肯定回答率の低い下位 3 項目は「チームワーク・リーダーシップ」(55.0%)、「語学力」(65.0%)、「ディスカッションスキル」(75.0%)であった。

3.9 授業・カリキュラム評価

6 項目に対して、A と B という対立する選択肢を提示し、「A にあてはまる」、「A にややあてはまる」、「どちらともいえない」、「B にややあてはまる」、「B にあてはまる」の 5 段階で回答を求めた。「A にあてはまる」と「A にややあてはまる」の回答率の合計を A 回答率とし、「B にあてはまる」と「B にややあてはまる」の回答率の合計を B 回答率とする。

「A 単位を楽に取れる授業がよい」と「B 興味のある授業がよい」に対して、学域 4 年次生では、A 回答率が 35.6%、B 回答率が 46.3%であった。経年変化を見ると、A 回答率は平成 30 (2018) 年度 47.2%、令和元 (2019) 年度 40.1%、令和 2 (2020) 年度 35.6%で漸減し、B 回答率は平成 30 (2018) 年度 41.0%、令和元 (2019) 年度 41.3%、令和 2 (2020) 年度 46.3%と漸増した。博士前期課程 2 年次生では、A 回答率が 30.3%、B 回答率が 47.4%であり、博士後期課程 3 年次生では、A 回答率が 40.0%、B 回答率が 50.0%であった。

「A 授業のレベルが高すぎる」と「B 授業のレベルが低すぎる」に対して、学域 4 年次生では、A 回答率が 32.2%、B 回答率が 7.3%であった。経年変化は A 回答率も B 回答率もほぼ横這いの傾向があった。博士前期課程 2 年次生では、A 回答率が 36.2%、B 回答率が 8.6%であり、博士後期課程 3 年次生では、A 回答率が 30.0%、B 回答率が 0.0%であった。

「A 授業で出される課題が多く、負荷が高すぎる」と「B 授業で出される課題が少なく、負荷が低すぎる」に対して、学域 4 年次生では、A 回答率が 57.6%、B 回答率が 13.0%であった。経年変化を見ると A 回答率が令和元 (2019) 年度より大幅に上昇していた (平成 30 (2018) 年度 55.1%、令和元 (2019) 年度 51.2%、令和 2 (2020) 年度 57.6%)。博士前期課程 2 年次生では、A 回答率が 43.4%、B 回答率が 16.5%であり、博士後期課程 3 年次生では、A 回答率が 30.0%、B 回答率が 15.0%であった。

「A 教員との距離が近い」と「B 教員との距離が遠い」に対して、学域 4 年次生では、A 回答率が 29.4%、B 回答率が 30.5%であった。経年変化は B 回答率が令和元 (2019) 年度に比べて大幅に低下した (平成 30 (2018) 年度 34.6%、令和元 (2019) 年度 38.9%、令和 2 (2020) 年度 30.5%)。博士前期課程 2 年次生では、A 回答率が 42.1%、B 回答率が 21.1%であった。博士後期課程 3 年次生では、A 回答率が 45.0%、B 回答率が 25.0%であった。

「A 自由に意見を言ったり、議論したりする場が多い」と「B 自由に意見を言ったり、議論したりする場が少ない」に対して、学域 4 年次生では A 回答率が 20.9%、B 回答率が 47.5%であった。経年変化を見ると B 回答率が令和元（2019）年度に比べて大幅に低下した（平成 30（2018）年度 52.5%、令和元（2019）年度 59.1%、2020 年度 47.5%）。博士前期課程 2 年次生では A 回答率が 29.7%、B 回答率が 45.4%であり、博士後期課程 3 年次生では A 回答率が 35.0%、B 回答率が 30.0%であった。

「A 周囲の学生の意識が高い」と「B 周囲の学生の意識が低い」に対して、学域 4 年次生では A 回答率が 46.3%、B 回答率が 15.8%であった。経年変化を見ると、A 回答率が上昇し（平成 30（2018）年度 29.7%、令和元（2019）年度 36.5%、令和 2（2020）年度 46.3%）B 回答率が低下した（平成 30（2018）年度 32.3%、令和元（2019）年度 24.2%、令和 2（2020）年度 15.8%）。博士前期課程 2 年次生では A 回答率が 44.8%、B 回答率が 21.7%であり、博士後期課程 3 年次生では A 回答率が 45.0%、B 回答率が 25.0%であった。

3.10 力を入れたこと

「専門分野の勉強（採用試験対策のための勉強を除く）」、「教養を身につけるための勉強」、「卒業研究」、「語学に関する勉強」、「留学または留学のための準備」、「資格取得・スキル習得のための勉強」、「公務員・教員等の採用試験対策のための勉強」、「就職活動に向けた準備（業種・企業研究、人脈づくりなど）」、「クラブ活動（部活動）サークル活動」、「友人や先輩・後輩など、人との交流」、「社会活動（ボランティア、NPO など）」、「アルバイト」、「その他」、「特になし」の 14 項目から 1 位、2 位、3 位の選択を求めた。1 位と 2 位と 3 位の選択率の合計を以下では選択率と呼ぶ。

学域 4 年次生では、選択率の高い上位 3 項目は「卒業研究」（66.1%）、「専門分野の勉強」（63.3%）、「クラブ活動（部活動）サークル活動」（39.0%）であり、選択率の低い下位 3 項目は「公務員・教員等の採用試験対策のための勉強」（0.0%）、「社会活動」（0.6%）、「留学または留学のための準備」（2.3%）であった。経年変化を見ると、選択率が大幅に上昇したのは「教養を身につけるための勉強」（平成 30（2018）年度 19.0%、令和元（2019）年度 20.6%、令和 2（2020）年度 29.9%）、「卒業研究」（平成 30（2018）年度 59.7%、令和元（2019）年度 61.1%、令和 2（2020）年度 66.1%）であった。一方、選択率が大幅に減少したのは「クラブ活動（部活動）サークル活動」（平成 30（2018）年度 47.1%、令和元（2019）年度 44.8%、令和 2（2020）年度 39.0%）、「アルバイト」（平成 30（2018）年度 33.1%、令和元（2019）年度 26.6%、令和 2（2020）年度 22.0%）であった。

博士前期課程 2 年次生では、選択率の高い上位 3 項目は「卒業研究」（75.0%）、「専門分野の勉強」（73.0%）、「クラブ活動（部活動）サークル活動」（31.6%）であり、選択率の低い下位 4 項目は「公務員・教員等の採用試験対策のための勉強」（0.7%）、「社会活動」（2.6%）、「資格取得・スキル習得のための勉強」（5.3%）、「その他」（5.3%）であった。博士後期課程 3 年次生では、選択率の高い上位 3 項目は「卒業研究」（80.0%）、「専門分野の勉強」（75.0%）、「教養を身につけるための勉強」（25.0%）であり、選択率の低い下位 5 項

目は「公務員・教員等の採用試験対策のための勉強」(0.0%)、「社会活動」(0.0%)、「留学または留学のための準備」(5.0%)、「就職活動に向けた準備」(5.0%)、「その他」(5.0%)であった。

3.11 読書量

「月に4冊以上」、「月に2~3冊くらい」、「月に1冊くらい」、「ほとんど読まない」から選択を求めた。

学域4年次生では、「4冊以上」が6.8%、「2~3冊くらい」が16.4%、「1冊くらい」が36.7%、「ほとんど読まない」が40.1%であった。経年変化を見ると、「4冊以上」が令和元(2019)年度に比べて大幅に低下した(平成30(2018)年度11.8%、令和元(2019)年度13.9%、令和2(2020)年度6.8%)。一方で、「1冊くらい」が令和元(2019)年度に比べて大幅に上昇した(平成30(2018)年度30.8%、令和元(2019)年度29.0%、令和2(2020)年度36.7%)。

博士前期課程2年次生では、「4冊以上」が5.9%、「2~3冊くらい」が22.4%、「1冊くらい」が39.5%、「ほとんど読まない」が32.2%であった。博士後期課程3年次生では、「4冊以上」が10.0%、「2~3冊くらい」が30.0%、「1冊くらい」が45.0%、「ほとんど読まない」が15.0%であった。

3.12 自習時間(週あたり)

「10時間以上」、「7~10時間未満」、「5~7時間未満」、「4~5時間未満」、「3~4時間未満」、「2~3時間未満」、「1~2時間未満」、「1時間未満」、「自習はしていない」の9項目から選択を求めた。

学域4年次生において、5時間以上を選択している割合は55.3%で、経年変化でも上昇している(平成30(2018)年度27.0%、令和元(2019)年度42.4%、令和2(2020)年度55.3%)。一方、2時間未満を選択している割合は16.4%で、経年変化では低下している(平成30(2018)年度33.8%、令和元(2019)年度27.0%、令和2(2020)年度16.4%)。

博士前期課程2年次生において、5時間以上を選択している割合は46.1%で、2時間未満を選択している割合は18.4%であった。博士後期課程3年次生において、5時間以上を選択している割合は60.0%で、2時間未満を選択している割合は20.0%であった。

3.13 学びへの取り組み

5項目について、「よくした」、「時々した」、「ほとんどしなかった」、「まったくしなかった」の4段階で回答を求めた。「よくした」と「時々した」の回答率の合計を肯定回答率とする。

学域4年次生において、各項目の肯定回答率は「必要な予習や復習はしたうえで授業に臨む」が62.1%、「授業中、グループワークやディスカッションに積極的に参加する」が71.2%、「板書や投影資料以外でも大事なことはノートにとる」が81.4%、「授業の内容でわ

からないことは教員に質問や相談に行く」が44.6%、「授業と関わりのないことでも、興味を持ったことについて自主的に学習する」が69.5%であった。経年変化を見ると、どの項目も令和元（2019）年度に比べて肯定回答率が上昇していた。

博士前期課程2年次生において各項目の肯定回答率は、上に挙げた項目順でそれぞれ、62.5%、74.4%、86.9%、43.4%、78.3%であり、博士後期課程3年次生では、55.0%、70.0%、90.0%、70.0%、85.0%であった。

3.14 専門ゼミ・研究室への所属状況

学域4年次生では、「所属している」が98.3%であり、「応募したが、入れなかった」が1.7%であった。博士前期課程2年次生では、「所属している」が99.3%、「その他（ゼミ・研究室の制度はないなど）」が0.7%であった。博士後期課程3年次生では、「所属している」が90.0%、「応募したが、入れなかった」が5.0%、「応募しなかった」が5.0%であった。

3.15 身につけたい英語のレベル

レベルに応じて、「英語圏の大学・大学院への留学や、英語を使って仕事をする際に支障がないレベル」、「英語圏に長期滞在して生活するのに支障がないレベル」、「身の回りの話題に関してやりとりができ、海外ホームステイや短期の語学研修で楽しめるレベル」、「道順やメニューの説明など簡単な質問に答えられるレベル」、「英語を積極的に身につけようとは考えていない」の5段階から回答を求めた。

学域4年次生では、「身の回りの話題に関してやりとりができ、海外ホームステイや短期の語学研修で楽しめるレベル」が36.2%と最も多く、そこを中心にしてレベルの変化に対して回答率も減少している。経年変化では、「英語圏の大学・大学院への留学や、英語を使って仕事をする際に支障がないレベル」の回答率が減少傾向にある（平成30（2018）年度17.5%、令和元（2019）年度16.7%、令和2（2020）年度11.9%）。

博士前期課程2年次生では、「身の回りの話題に関してやりとりができ、海外ホームステイや短期の語学研修で楽しめるレベル」が39.5%と最も多く、その次に多いのが「英語圏の大学・大学院への留学や、英語を使って仕事をする際に支障がないレベル」の19.1%である。博士後期課程3年次生では、「英語圏の大学・大学院への留学や、英語を使って仕事をする際に支障がないレベル」が35.0%で回答率が最も高かった。

3.16 留学経験・留学意向

ほとんどの学生に留学経験がなく、留学する意向もないことが分かった。

学域4年次生では、「留学経験なし」が86.4%であり、「留学はしたくない」が55.4%であった。経年変化は「留学経験なし」について、平成30（2018）年度が79.5%、令和元（2019）年度が80.2%、令和2（2020）年度が86.4%であり、「留学はしたくない」について、平成30（2018）年度が46.4%、令和元（2019）年度が43.3%、令和2（2020）年度が55.4%であった。

博士後期課程 3 年次生では、「留学経験なし」が 45.0%であり、「留学はしたくない」が 30.0%であった。一方で、「1 年以上」の留学経験に対して 20.0%の回答があり、「1 年以上」の留学意向に対して 40.0%の回答があった。

3.17 大学納得度

「とてもそう思う」₁、「どちらかといえばそう思う」₂、「あまりそう思わない」₃、「まったくそう思わない」の選択を求めた。「とてもそう思う」と「どちらかといえばそう思う」の選択率の合計を肯定選択率とした。

学域 4 年次生では、肯定選択率が平成 30(2018)年度 86.3%、令和元(2019)年度 85.7%、令和 2(2020)年度 87.6%であり、ほぼ横這い状態である。博士前期課程 2 年次生と博士後期課程 3 年次生の肯定選択率はそれぞれ 95.4%、100.0%であった。

3.18 興味関心の一致度

「一致している」₁、「一致していないが、興味関心に近い分野」₂、「興味関心とは異なる分野」₃、「まだ自分の興味関心がわからない」₄、「所属する学部・学科の学問内容がよくわからない」₅、「その他」から選択を求めた。

学域 4 年次生では「一致している」が 58.8%、「一致していないが、興味関心に近い分野」が 21.5%、「興味関心とは異なる分野」が 6.2%、「まだ自分の興味関心がわからない」が 11.3%、「その他」が 2.3%であった。経年変化では「まだ自分の興味関心がわからない」が令和元(2019)年度に比べて上昇した(平成 30(2018)年度 8.0%、令和元(2019)年度 7.5%、令和 2(2020)年度 11.3%)。

博士前期課程 2 年次生では「一致している」が 70.4%、「一致していないが、興味関心に近い分野」が 22.4%、「興味関心とは異なる分野」が 3.9%、「まだ自分の興味関心がわからない」が 2.0%、「その他」が 1.3%であった。

博士後期課程 3 年次生では「一致している」が 70.0%、「一致していないが、興味関心に近い分野」が 15.0%、「興味関心とは異なる分野」が 15.0%であった。

3.19 他大学の再受験や退学の検討

「検討したことはない」₁、「以前検討していたが、今は考えていない」₂、「現在、検討している」の 3 段階から選択を求めた。

学域 4 年次生では、「検討したことはない」が 76.3%、「以前検討していたが、今は考えていない」が 22.0%、「現在、検討している」が 1.7%であった。経年変化はほぼ横這いであった。

博士前期課程 2 年次生において、各項目の回答率は上記の順に 77.0%、21.1%、2.0%であり、博士後期課程 3 年次生においては 70.0%、30.0%、0.0%であった。

3.20 適応状況

3項目について、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の4段階で回答を求めた。「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」の回答率の合計を肯定回答率とする。

学域4年次生では、「勉強面/進路面で相談できる友人が学内にいる」が78.5%、「ちょっとしたことでも相談できる教員がいる」が49.1%、「大学の校風や雰囲気は、自分に合っている」が82.5%であった。経年変化に関して、「大学の校風や雰囲気は、自分に合っている」では肯定回答率の上昇傾向が見られた(平成30(2018)年度79.5%、令和元(2019)年度81.3%、令和2(2020)年度82.5%)。

博士前期課程2年次生では各項目の肯定回答率は上記の順に78.9%、62.5%、84.8%であり、博士後期課程3年次生では50.0%、85.0%、95.0%であった。

3.21 困っていること

「困っていることはない」、「やりたいこと(就職・進路面)が見つからない」、「希望する進路に進めるか不安」、「授業についていけない」、「学びたいことが見つからない」、「学びたいことが学べていない」、「教員との人間関係」、「友人、異性、先輩・後輩との人間関係」、「経済的な事情」、「その他」の10項目を自由に選択することで回答を求めた。

学域4年次生において、回答率の高い上位3項目は「困っていることはない」(35.6%)、「やりたいこと(就職・進路面)が見つからない」(23.7%)、「希望する進路に進めるか不安」(18.1%)であった。経年変化を見ると、「困っていることはない」は令和元(2019)年度からほぼ変わらず(平成30(2018)年度30.4%、令和元(2019)年度35.3%、令和2(2020)年度35.6%)、「やりたいこと(就職・進路面)が見つからない」(平成30(2018)年度18.6%、令和元(2019)年度19.4%、令和2(2020)年度23.7%)と「希望する進路に進めるか不安」(平成30(2018)年度20.2%、令和元(2019)年度13.5%、令和2(2020)年度18.1%)は令和元(2019)年度に比べて回答率が上昇している。一方で、「教員との人間関係」(平成30(2018)年度2.7%、令和元(2019)年度3.6%、令和2(2020)年度0.0%)と「友人、異性、先輩・後輩との人間関係」(平成30(2018)年度3.4%、令和元(2019)年度6.0%、令和2(2020)年度2.3%)は令和元(2019)年度に比べて回答率が低下している。

博士前期課程2年次生では、回答率の高い上位3項目が「困っていることはない」(63.8%)、「その他」(11.8%)、「経済的な事情」(7.2%)であり、博士後期課程3年次生では、「困っていることはない」(30.0%)、「その他」(20.0%)、「希望の進路に進めるか不安」(15.0%)であった。

3.22 居住形態

学域4年次生では、「家族と同居」が51.4%、「一人暮らし」が37.9%、「寮」が10.2%、「それ以外」が0.6%であった。大きな経年変化は見られなかった。

博士前期課程 2 年次生では、「家族と同居」が 50.7%、「一人暮らし」が 40.8%、「寮」が 5.3%、「それ以外」が 3.3%であり、博士後期課程 3 年次生では、「家族と同居」が 50.0%、「一人暮らし」35.0%、「寮」が 15.0%、「それ以外」が 0.0%であった。

3.23 卒業後の進路

学域 4 年次生では「大学院進学」が 62.7%で最も多く選択され、経年変化を見ると、平成 30(2018)年度は 51.3%、令和元(2019)年度は 54.8%であり、上昇していることが分かった。一方、「企業・団体」は平成 30(2018)年度 38.0%、令和元(2019)年度 37.3%、令和 2(2020)年度 29.4%であり、低下していることが分かった。

博士前期課程 2 年次生では、「企業・団体」が 81.6%で最も多く選択され、次点が「大学院進学」の 12.5%であった。博士後期課程 3 年次生では、「企業・団体」が 35.0%で最も多く選択され、次点が「教員・保育士」の 20.0%であった。

3.24 専門領域と希望進路との関係

「大学で学ぶ専門分野と直結した職業に必ず就きたい」、「大学で学ぶ専門分野と直結した職業に就くことを望んでいるが、それ以外の職業でも構わない」、「大学で学ぶ専門分野と直結するかどうかにはこだわらない」、「大学で学ぶ専門分野とは関係のない職業に就きたい」、「その他」、「わからない・未定」から選択して回答することを求めた。

学域 4 年次生においては、各項目の回答率は上記の順に、14.1%、45.8%、32.2%、3.4%、1.1%、3.4%であった。経年変化を見ると、「大学で学ぶ専門分野と直結した職業に就くことを望んでいるが、それ以外の職業でも構わない」が令和元(2019)年度は 39.3%であったのに対して、令和 2(2020)年度は 45.8%であり、大幅に上昇した。

博士前期課程 2 年次生においては、24.3%、38.2%、32.9%、2.6%、0.7%、1.3%であり、博士後期課程 3 年次生においては、25.0%、55.0%、10.0%、5.0%、0.0%、5.0%であった。

3.25 進路への準備状況

4 項目に対して「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」を選択することで回答を求めた。「非常にあてはまる」と「ややあてはまる」の選択率の合計を肯定回答率とする。

項目「自分の性格や行動パターン、得意分野などを理解している」に対して、学域 4 年次生の肯定回答率は 89.3%であり、経年変化はほぼ横這いであった。博士前期課程 2 年次生では 93.4%、博士後期課程 3 年次生では 90.0%であった。

項目「社会や職業のことを知るために、毎日、ニュースをチェックしている」に対して、学域 4 年次生の肯定回答率は 50.9%であり、経年変化は若干の上昇傾向にあった。博士前期課程 2 年次生では 63.8%、博士後期課程 3 年次生では 60.0%であった。

項目「自分が付きたい職業や仕事が明確になっている」に対して、学域4年次生の肯定回答率は46.3%であり、経年変化は若干の減少傾向にあった。博士前期課程2年次生では83.5%、博士後期課程3年次生では90.0%であった。

項目「自分の将来就きたい仕事、やりたいことに向けて準備をしている」に対して、学域4年次生の肯定回答率は41.8%であり、経年変化は減少傾向にあった。博士前期課程2年次生では82.9%、博士後期課程3年次生では85.0%であった。

3.26 インターンシップの経験

「インターンシップには参加したことがない」と回答した割合が学域4年次生では59.3%、博士後期課程3年次生では55.0%と最も高かった。一方、博士前期課程2年次生では、「インターンシップには参加したことがない」と回答した割合は15.8%であり、1日以上インターンシッププログラムに参加したと選択した割合は82.9%であった。特に、「2週間を超えるインターンシッププログラムに参加した」と回答した割合は23.7%であった。

学域4年次生に対する経年変化はほぼ横這いであった。